



発行所  
**大阪府農業会議**  
 大阪市中央区農人橋2-1-33  
 JAバンク大阪信連事務センター3階  
 電話 直通 06(6941)2701~2  
<http://www.agri-osaka.or.jp>  
 発行人 中谷 清

明けまして  
 おめでとうございます  
 ございます



平成29年元旦  
 大阪府農業会議  
 役員職員一同

年金の  
**お受け取りは**  
**JAで**

JAバンク大阪(JA/信連)

JAバンク大阪へ

なにわの伝統野菜「天王寺蕪」

およそ500年以上の歴史を持つ天王寺蕪は栽培時に地上部に蕪が浮き上がるため「天王寺浮き蕪」と呼ばれて来ました。

大阪市天王寺付近が発祥といわれ、純白で扁平、甘みが強く肉質は緻密。香りが良く、11月頃から正月までの期間、竹垣に蕪を並べ、干し蕪を作る光景は、江戸時代の風物詩だったそうです。

与謝蕪村が「名物や蕪の中の天王寺」と詠み、明治の俳人・正岡子規は東京で天王寺蕪を待ちわび、「此頃は蕪曳くらん天王寺」と詠んでいます。

又、江戸時代に現在の野沢温泉村の健命寺第8代住職が京都遊学の折、天王寺蕪の種子を持ち帰り蒔いたところ気候風土の違いから野沢菜になったといわれ、村史に『ルーツは天王寺蕪』との記載あり。昨秋には四天王寺に野沢菜伝来記念碑が建立されました。

文/清原風早子

(なにわの伝統野菜

研究会代表)

植物画/吉田広美

(日本植物画倶楽部会員)

# 謹賀新年

## 新春を迎えて

大阪府農業会議会長 中谷 清

新年明けましておめでとーございませう。皆様方にはお健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年4月に農業委員会法、農地法の一部改正を含む「農業協同組合法等の法律を改正する等の法律」が施行され、新たな農業委員会制度がスタート致しました。河内長野市、東

新年あけましておめでとーございませう。昨年、大阪を訪れた外国人の方が過去最高を4年連続更新するなど、大阪の賑わいや景気にも明るい兆しが見えてきました。この流れを本格的なものとし、府

国はこの間、農業を成長産業と位置づけ、農業・農村全体の所得増大を達成するために生産性の向上、6次産業化、農業経営の法人化推進など様々な農業改革を実施しております。

農業所得の増大をめざすことは当然であります。重要なこととはそれぞれの地域の実情を踏まえた農業の活性化であると考へております。とりわけ、農業・農地と深い結びつきをもつ農業委員会、JA等農業関係機関・団体が中心となつて、地域農業の担い手の方々が将来展望を持てる都市農業を確立することが不可欠であります。

農業委員会系統組織は新たな体制の下、引き続き、農業者のため、府政においては「変革と挑戦」を基本姿勢に、これまでの成果を土台に、民間、市町村はじめ関係機関と連携しつつ、具体的な取組みを本格化する年にしたいと思ひます。

大阪の農業・農空間は、都市近郊農業の利点を活かし、府民に新鮮で安全・安心な農作物を提供することはもとより、生活に潤いとやすらぎをもたらす、快適な環境を提供するといった多面的な役割を果たしています。そのため、府では農業を重要

代表として、地域の農地を守るものが大きな任務となります。そのためにも農地の利用集積促進や遊休農地の発生防止・解消、担い手の確保・育成、さらには地域住民への農業理解促進などの活動も期待されています。

昨今、新鮮な農産物の提供、防災空間の確保、農業体験の場の提供などの農業者の地道な努力によつて農業・農地に対する地域住民の期待は高まり、昨年5月には都市農業振興基本法に基づく基本計画が閣議決定されました。

今後、都市農業の安定的な継続や多様な機能の発揮を促す具体的施策の実現と各自自治体の都市農業振興基本計画策定を促す取組みが課題となつております。このような農業・農業委員会を取り巻く情勢を踏まえ、私たちは地域の合意形成を基本とする農業委員会系統組織の活動の原点に立ち返ろうと決意を新たにしています。そのことを基本に農地制度の適正執行や農業経営改善支援などの活動を地道に行い、大阪府及び市町村行政、農業関係団体から期待されている役割を果たして参りたいと思ひます。どうか本年も皆様方のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

結びに、皆様方にとりまして本年が希望に満ちた佳き年となりますようご祈念申し上げます。新年のあいさつといたします。

## 新年のごあいさつ

大阪府知事 松井 一郎

内のすみずみまで景気回復を行きわたらせ、府民の皆様が豊かさを実感できる大阪を実現したいとの思いを強くしています。



このため、府政においては「変革と挑戦」を基本姿勢に、これまでの成果を土台に、民間、市町村はじめ関係機関と連携しつつ、具体的な取組みを本格化する年にしたいと思ひます。大阪の農業・農空間は、都市近郊農業の利点を活かし、府民に新鮮で安全・安心な農作物を提供することはもとより、生活に潤いとやすらぎをもたらす、快適な環境を提供するといった多面的な役割を果たしています。そのため、府では農業を重要

代表として、地域の農地を守るものが大きな任務となります。そのためにも農地の利用集積促進や遊休農地の発生防止・解消、担い手の確保・育成、さらには地域住民への農業理解促進などの活動も期待されています。昨今、新鮮な農産物の提供、防災空間の確保、農業体験の場の提供などの農業者の地道な努力によつて農業・農地に対する地域住民の期待は高まり、昨年5月には都市農業振興基本法に基づく基本計画が閣議決定されました。今後、都市農業の安定的な継続や多様な機能の発揮を促す具体的施策の実現と各自自治体の都市農業振興基本計画策定を促す取組みが課題となつております。このような農業・農業委員会を取り巻く情勢を踏まえ、私たちは地域の合意形成を基本とする農業委員会系統組織の活動の原点に立ち返ろうと決意を新たにしています。そのことを基本に農地制度の適正執行や農業経営改善支援などの活動を地道に行い、大阪府及び市町村行政、農業関係団体から期待されている役割を果たして参りたいと思ひます。どうか本年も皆様方のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

結びに、皆様方にとりまして本年が希望に満ちた佳き年となりますようご祈念申し上げます。新年のあいさつといたします。今年も府庁組織一丸となり、農業施策を力強く推進してまいりますので、皆さまの一層のご理解とご協力をお願いいたします。本年が皆様にとつて実りある素晴らしい年となりますようお祈りします。





# 府農委大会議案など要請

全国農委会長代表者集会

全国農業会議所は12月1日、東京都・メルパルクホールで全国農業委員会会長代表者集会を開いた。大阪府からは各地区農委連合会会長、農業会議役員など10人が参加した。

集会は1部と2部に分かれ、第1部では、「農地利用の最適化を加速させよう」と題したパネルディスカッションが開催された。全国農業会議所の柚木事務局長の進行の下、岩手県北上市農委の小笠原事務局長、栃木県栃木市農委の大橋会長、福岡県糸島市農委の藤井会長がそれぞれ農地利用の最適化に向けた取り組みについて報告。これら

の報告を踏まえ、「農地利用の最適化の推進」に関する申し合わせ決議及び「情報提供活動」の一層の強化に関する申し合わせ決議が行われた。

第2部では、「農地利用の最適化に向けた施策推進に関する要請決議」が採択された。要請活動では、代表者集会の要請決議とともに、10月28日開催の大阪府農業委員会大会で採



四天王寺に野沢菜伝来記念碑を建立

## 天王寺蕪と野沢菜の

### 縁(えにし) 碑除幕

江戸時代に大阪の四天王寺から長野の野沢温泉村へと伝わった天王寺蕪の種から、野沢菜が誕生したとされる記念碑除幕式が11月10日、四

天王寺(大阪市)境内で行われ、関係者ら約100人が祝った。記念碑(高さ約1・2メートル)は野沢温泉村村制60周年の記念事業として村が建立。野沢菜伝来250年にあたる7年前より、野沢温泉村と天王寺蕪の会(難波利三会長)らが

伝来した往時の街道を共に踏破することで交流を深めてきたことが今回の建立に繋がった。式では、除幕式に続いて建立落慶法要が営まれた。富井俊雄野沢温泉村長は挨拶で、「この記念碑が今後何世紀にもわたり大阪と野沢温泉村との物語を伝えてくれるだろう」と述べた。また大阪からは「大阪産(もん)を野沢菜に匹敵する全国ブランドに育てたい。本碑が野沢温泉

村と天王寺蕪ゆかりの方々との交流のシンボルとなることを期待します」との松井府知事のメッセージが代読され、その後、吉村大阪市長のメッセージが代読された。参加した天王寺・阿倍野両区長からも祝辞が述べられた。閉式後は懇親会が行われ、信州の郷土料理や除幕式を記念した天王寺蕪料理などを味わった。(農業ジャーナリスト 笹井良隆)

## 府内直売所バスツアー

農業理解促進で



説明を熱心に聞き入る参加者たち

大阪府農業会議は12月5日、府内農産物直売所めぐりバスツアーを実施。NPO法人にわ

の伝統野菜研究会などから消費者約30人を迎え、JAが運営する3か所の農産物直売所を見学した。

このバスツアーは「かけがえない農地と担い手を守り、活かす『大阪農業リフレッシュ運動』の一環として、大阪農業の理解促進の一助とするため実施したもの。(北川)

扱された「都市農業振興基本計画に基づく具体的施策の推進に

関する要請決議」について、大阪選出国會議員等に対して要請

した。(北川)

# 特集 輝け 大阪農業の未来

農業者の高齢化、担い手の減少が続いている大阪農業。将来を見据えると、若い世代の活躍が望まれる。

新年にあたり、今後、大阪農業をリードすることが期待される希望と活力に溢れた若手、中堅の農業者に、彼らの経営ビジョンや農業にかける思いを聞いた。

## イチゴ作りを極めたい

八尾市・森川 泰典さん

八尾市のイチゴ狩り・直売農園「グランドベリー」は、大阪市内から車で約30分。農園は住宅地の中にある。

利便のよいイチゴ狩り農園として、土日は予約がすぐに埋まる。最近では、東南アジアからのインバウンド(訪日外国人)の



将来にわたり持続的な経営をめざしている

して父・義和さん(67)の3人で取り組む、繁忙期にはアルバイトを雇用し対応している。

ハウス面積は、約20<sup>ア</sup>。いずれも市街化区域の中にあり、生産緑地の指定を受けている。

「現在3箇所に分散しているハウスを集約し規模拡大を図りたいが、市街化区域なので貸借が難しい。今検討されている都市農業の新たな政策に期待している」と語る。

「今は、大阪アグリアカデミアを受講中。他業種の経営者や専門家の話が聞け、刺激を受けることが多い」と話す。

農業経営基盤の強化プランのコンテンツである「おおさかノーリーグランプリ」にも応募した。

経営の目標は、プロ農業者として、イチゴ作りをもっと極め、美味しいイチゴをお客さんに食べてもらうこと。

さらに一層の省力化や高品質生産を図るため、高度なセンサーを利用し、データに基づき適切な営農が可能となるスマート農業にも、できれば近いうちに挑戦できればと意欲を示す。

農業の経営基盤を強くし、将来にわたって持続的な経営をめざしたいと考えている。

(浅井)

## 新たなアイデアで経営刷新

羽曳野市・藤井 貫司さん

藤井貫司さん(36)は羽曳野市誉田で農業を営む藤井農園の3代目。平成24年に脱サラし、この世界に踏み出した。

現在は露地イチジク40<sup>ア</sup>、ハウスイチジク10<sup>ア</sup>のほか、トマト、ジャガイモ、タマネギなど20<sup>ア</sup>を栽培している。大阪では

めずらしいイチジクのハウスは、祖父が18年前に取り入れた。「今は様々な販路があり、色んなところに売れるので可能性を感じる」と話す藤井さん。以前は全て市場出荷だった藤井農園だが、道の駅やスーパー、インターネット販売にも販路を広げている。ネット販売では問い合わせも多く、北海道から取り寄せる消費者もあり、手応えを感じているという。

都市農業であることのメリットは、アクセスの良さだと話



このハウスでの様々な取り組みを考えている

(田村)



# 「自分発信」で農業を

貝塚市・西阪 和正さん

貝塚市の西阪和正さん(29)は、40坪の農地でシュンギクをはじめとする軟弱野菜を生産する若手農業者。先日、40歳までの10年間でどんな目標を持って経営を続けていくか、同じ泉州の「農の匠」に相談したという。

西阪さんは、就農した20歳の時にも、この先農業経営者としてどのように成長するかという計画を立てていた。25歳までの5年間は農産物の生産を主軸にし、25歳から30歳は、他の農業

者に負けない経営者になる努力(出荷先の開拓や年間契約、月々の出荷量、値決め等)を実践している。

現在、農の雇用事業を活用して従業員を雇っているが、これは将来を見据えての決断だという。西阪さんは、22歳で亡父の

## ブドウ作りに付加価値を

柏原市・奥野 成樹さん

と考えるブドウを作り、そのブドウを求めて直売所を訪れるお客さんをもっと増やしたい」というのが目標の一つだ。

平成27年に実家に戻り就農するまでは、商品の開発・企画を行う商品プランナーとして東北で5年間勤めていた。東北では、若手農業者が農園を開放した交流イベントを行い、ホームページや商品のデザインを工夫して自分たちの農業を魅力的にPRする姿を目の当たりにし、「農業も幅広い視野で他分野のアイデアを取り入れれば、もっと可能性を感じていた。」

「お客さんに喜んでもらえるおいしいブドウ作りと、PRや販売方法を工夫してブドウに付加価値をつける。この2つの両立をめざしている」と話すのは、柏原市青谷の「美果園(奥野ぶどう園)」の奥野成樹さん(30)。

現在、父の正さん(60)の指導のもと1・5畝の農地でデラウェアを中心にブドウを栽培。生産したブドウは、市場出荷のほか、美果園で開設している直売所でも販売。「自信を持っておいしい

農地を相続し、28歳まで家族とパートのみで経営してきた。経験豊かな父と後継者という形で経営を行う農家には、現在差をつけられていても、10年後には、ベテランの従業員が成長し、自分の右腕として農園を支えてくれることを期待している。

て迷惑ではないかと思われるが、意外にも「うちの作業は難しくないので、すぐ戦力になる」との事。「相手は、ボランティアの方なので、私は金銭では代えられないものを相手に持つて帰ってもらいたい」。そう思っ

触れてもらうことで、将来地域で増加している遊休農地を憂い解消のために一緒に耕してくれる人になればとも考えている。今のところ、農業の規模拡大は考えていないが、農業ボランティアをもっと普及させることで、消費者の直ぐそばにある大切な農業を発信していきたいと言う大きな夢を持っている。

(日浦)



「何事も自分発信」という姿勢が自分らしさ」と西阪さん



地元の4Hクラブにも参加。「全員がブドウ農家。栽培のことは色々相談している」と奥野さん

実際に就農すると、7月のブドウのシーズンは想像以上に農作業が忙しいと痛感。「作業が落ち着いている冬の時期にビジネスのことを勉強したい」と考えた奥野さんは、9月から大阪アグリアカデミアで様々な分野の経営手法を学んでいる。

「例えばフードデザイナーの講義では、ロゴやデザインなどに工夫を凝らした様々な業界の事例が紹介されていて、見せ方一つでこんなにも変わるのかと感じ、印象に残った。自分の経営

(沼田)

# 守口大根に驚き

## 北河内地区都市農業啓発事業

北河内地区農業委員会連合会（会長・中野利佑門真市農委会長）と農業会議は11月29日に守口市で第36回北河内地区都市農業啓発事業を実施した。

地区内7市の農業委員会の呼びかけで農業委員、消費者約100人が守口市役所に集合。

J A理事で大阪府農の匠でもある島田民雄守口市農業委員が「なにわの伝統野菜守口大根の展望」と題して講演した。

守口大根は、諸説あるが、室町時代に淀川周辺で栽培されていた「宮前大根」の突然変異とされ、河内国守口の特産であった粕漬けの材料として用いられた。



守口大根の歴史について説明する島田委員

大阪府農業会議はこのほど、第9回遊休農地発生防止・解消活動表彰事業で応募のあった「豊能町牧農空間活性化協議会」の活動を全国審査委員会に推薦した。

牧農空間活性化協議会は、農業者の高齢化と担い手不足が深刻になる中、地域農業を自ら守っていくために平成24年に設立された。地域農業の活性化に向

たことから守口で広がったとされている。

その後、都市化や河川改修で廃れたが、平成17年に府の要請で市内農家の協力で復活に取り組み、平成19年には、なにわの伝統野菜に認定。20年からは守口市都市農業研究会が主体となり生産が開始された。

通常の大根より細長く、直径は2から3センチ、長さは約120センチに達し、地上約1メートルの囲いの中

に土を入れて畝を立てる方法で作付けが行われている。長いものは191センチ（コンクール出品）にもなる。

島田委員はこのほか、自身の栽培する木の芽、オクラ、茎レタス、トムギ（原種は中国のチンシャトウ、アスパラガスレタス）などにも言及。参加した消費者らに分かり易く説明した。

講演の後、住宅に囲まれて市の防災協力農地にも指定されて



守口大根の実物を用いて説明する田中委員（左）

いる田中明美守口市農業委員（大阪府農の匠）のほ場を見学。田中委員は守口大根の作付け

# 豊能町牧農空間活性化協を推薦

## 遊休農地解消活動・表彰事業

大阪府農業会議はこのほど、第9回遊休農地発生防止・解消活動表彰事業で応募のあった「豊能町牧農空間活性化協議会」の活動を全国審査委員会に推薦した。

牧農空間活性化協議会は、農業者の高齢化と担い手不足が深刻になる中、地域農業を自ら守っていくために平成24年に設立された。地域農業の活性化に向

けたプランを作成し、外部のボランティア等との連携により、地区の周囲約6キロに獣害防止柵を設置すると、いった獣害対策や、山際の遊休農地3154平方メートルに作物・果樹・山菜を植える再生活動に取り組んできた。

また、地区を活動エリアとする生活協同組合と協定を締結し、協議会と生協の組合員で組織するボランティア団体で遊休農地3806平方メートルの再生・保全活動を行う。植え付け・収穫

体験により食育や都市農村交流活動の推進にも大きく貢献。都市地域での遊休農地解消対策のモデル事例として他地域への波及効果が期待される。

このような活動が評価され、全国審査委員会に推薦した。

表彰事業は全国農業会議所が、遊休農地の発生防止・解消活動を展開する団体等で、その取り組みや成果が他の模範となる者を顕彰し広く普及すること、今後の遊休農地対策に寄与しようとす



ボランティア等の連携により獣害防止柵を設置

るもの。大阪からはこれまで9農委・団体等が受賞している。

（沼田）

は行っていないが、直売所に出すため、一畝に幾種類もの野菜を植え付け様々な品種を栽培しており、訪れた消費者は興味深そうに見入っていた。

この事業は、会場を北河内管内各農業委員会の持ち回りとして、農業委員会連合会と農業会議が消費者団体と農業委員の交流を通じて管内の農業理解を深めてもらおうと実施。今年で36年目を迎えた。

（鈴木）





# 現場を踏まえた施策が必要

## 大東市農委



遊休農地解消に向けた対応策を話し合う (大東市)

大東市農業委員会(橋本順昭会長)は、11月14日から12月12日にかけて農地パトロールを実施。14日に実施した北条、野崎、深野地区のパトロールは、農業委員2名、事務局1名で巡回した。

大東市は、市街化区域が多くを占める。転用により農地面積自体が年々減少しているという背景もあるが、農業委員や事務局の指導もあり、遊休農地は比較的少ない。この日は、地区内で解消されていない遊休農地を重点的に巡回したが、所有者が地区外に転出しているケースや、里道しかなく農業機械を入れるのが難しいなど、指導しても解消しづらい事情を抱えている様子が見受

けられた。また、比較的面積の大きい遊休農地についても、貸農園として活用するなどの方法について議論が交わされた。橋本会長は、「遊休農地解消に向けて指導する立場にある農業委員は、遊休化に至る個々の要因も見ている。現場の実態・意見を踏まえた施策が必要だと感じている」と話した。(沼田)



農地の貸借についての議論も交わされる (羽曳野市)

# 農地利用状況調査報告



一筆一筆丁寧に確認する (柏原市)

同地区は市街化区域と調整区域が混在しており、平地にある農地が多い地区である。昨年のパトロールの際と様子が異なる

羽曳野市農業委員会(堂山幸作会長)は、11月4日から9日にかけて農地パトロールを行った。9日に実施した西浦地区のパトロールは、農業委員5名、事務局2名で巡回した。昨年と比較すると、解消された遊休農地もあり、全体では減少。以前は背丈以上の高さまで草木が生え荒れていた農地も、

今回の調査では草刈りを行い管理されている様子が確認された。西浦地区は全域が農業振興地域の指定を受けている。道に面し比較的面積の大きい農地が遊休化している例がいくつか見受けられ、巡回する委員から「貸借に繋がらねばいいが...」といった言葉も漏れる。羽曳野市では、新規参入

者育成を目的として平成24年におどろ農促進連絡協議会を設立。地域の中心的な農業者の協力で新規就農を希望する者に対して研修を行った後、農地のあつせんに繋げており、巡回中も遊休農地を活用する手段の一つとして議論が交わされた。パトロール終了後、堂山会長は「市外に住んでいる所有者の農地についても適切に管理してもらえよう指導していく必要がある」と話した。(沼田)

# 農にふれる環境が必要

## 柏原市農委

柏原市農業委員会(文能啓志会長)は10月25日から11月18日にかけて農地パトロールを実施。11月18日は国分市場、田辺地区の農地を巡回し、地区担当の新屋委員と事務局2名で利用状況を調査した。

農地については周辺住民にも事情を尋ねるなどしたが、中には耕作者が死亡して休耕となっており、周辺から心配されている農地もあった。

新屋委員は、「今は現役で耕作している農家も後継者がおらず、あと数年したらどうしようかという声はよく聞く。今からでも小さい頃から農にふれる環

境を整えることが担い手対策に繋がり、柏原の農業にとって重要ではないか」と話している。(田村)

# 遊休農地の解消策を検討

## 羽曳野市農委

# 都市農業の継続・振興に向けて

## 相統対策等研修会

大阪府農業会議は、11月から12月にかけて、各市町村及び農業委員会と共催で相統対策等研修会を開いた。講師として全国農業会議所専門調査員の原修吉氏を迎え、都市農業の継続・振興を目的とした講演を行った。

11月9日には、大阪市と共催して、同市内J A茨田支店で開いた。「大阪都市型農業振興事業」農家にも必要な相統対策と都市農地保全のための関係法・制度」と題し、市内農業者約30名に対して、相統対策と生産緑地制度、都市農業振興基本計画について講演を行った。

12月8日には、泉南市農業委員会(中野吉次会長)と共催して、泉南市役所で開いた。「都市農業振興基本計画」と題し、農業委員約20名に対して、都市農業を取り巻いてきたこれまでの法制度と、都市農業振興基本計画、今後果たされるべき具体的な施策について講演を行った。

12月13日には、泉佐野市農業委員会(勝間富士男会長)と共催して、泉佐野市役所で開いた。「農家なら知っておきたい相統対策と生産緑地の概要」と

題し、農業委員約20名に対して、相統対策と生産緑地制度、相統税納税猶予制度について講演を行った。

これらの講演の中で原氏は、

相統対策について、「相続後も農地を守っていくという思いを持ち、事前に家族で話し合いをしておくことが重要」と述べ、都市農業振興基本計画については、「農業の展開が確実な都市農地について、生産緑地か否かにかかわらず農業振興施策を本格的に講じる必要がある」と説明し、都市農業の継続のために都市農地を守っていくことを求めた。

(沼田)



都市農地・農業を守るための対策について話す原氏

## 神戸市里づくりの取り組み視察

### 茨木市見山都市農村交流委

茨木市見山地区都市農村交流活動推進委員会は12月3日、神戸市西区神出地区の里づくり協議会の取り組みを視察した。

神戸市では、平成8年4月に美しい魅力あふれた快適な農村空間の形成をめざして「人と自然との共生ゾーン」の指定に関する条例」を制定した。

条例では、保全すべき農村地域を

「人と自然との共生ゾーン」に指定し、秩序ある土地利用の計画的推進を図るとともに、農村らしい景観の保全及び形成を目指している。

具体的には、集落を単位とした住民主体によって里づくり協議会を設立し、地域を活性化するためそれぞれ地域の課題を踏まえた地域振興計画を策定している。

今回視察した神出地区では、里づくり計画により、神出ファームビレッジ(農家レストラン)を中心に、農産物直売所や市民農園、さらには、イモ掘り、ミカン狩りの体験農園の開設など様々な取り組みを実施し

ている。

里づくり協議会の下に営農組合を組織し地域の農地管理・農作業請負も行っている。

同地区でも農業者、地域住民の高齢化が進んでおり、新規就農者などの新たな担い手の確保や、新住民の地域への呼び込みが課題となっている。

条例のめざす秩序ある計画的な土地利用では、区域指定の目的に合った土地利用しか認めないため、産業廃棄物・資材置場等は見られず、緑豊かな農村景観が維持されている。



神出地区の地域活性化に向けた取り組みを学ぶ

当日は、その他に神戸市農業公園、J A兵庫六甲の農産物直売所・六甲のめぐみを視察した。

(浅井)

## 全国農業図書案内

■納税猶予と仲良くつきあう方法 農家のための相統対策

平成20年に刊行した「相統税納税猶予制度ガイドブック」の改訂版。平成21年の農地法改正による相統税納税猶予制度の見直しや、平成27年からの課税強化にも対応。難解な表現を避け、今後適用を受ける農業者、既に適用済みの農業者のいずれにも対応した一冊。(コード 27124、1200円、B5判181頁)。



# 消費者目線で付加価値高める

## 農業経営改善研修会

大阪府農業会議は12月6日、大阪市内・プリムローズ大阪で大阪府農業経営者会議と共催で農業経営改善研修会を開いた。

府農業経営者会議会員、市町村農業委員会・農政担当課職員や農業者など約30人が参加。講師として(有)漂流岡山代表取締役阿部憲三氏を迎え、「ITを活用した農産物の販売と販路拡大」

と題して講演を行った。

漂流岡山は、岡山県産農産物のインターネット販売と地域の農業振興を主に行っている。インターネットを活用した農産物の販売については、「コストがあまりかからないと思われがちだが、広告費や専属スタッフの人件費などがかり、経費削減を目的に始めると失敗する可能性がある」と述べた。

続いて、農産物を販売するにあたって、消費者目線で商品の付加価値を高めることが重要であると説明。漂流岡山で売り出し方を工夫することで消費者のニーズを捉えた事例を紹介。

一例として、「安い」「おいしい」だけでなく、「面白い」「懐かしい」といった感情に着目し、子を持つ親世代から人気を呼んだナツメを取り上げ、「どんな人がどんなシチュエーションで買いかを消費者目線で逆引きして考えて欲しい」と主張した。

その後、漂流岡山の農産物流通システムについて説明。漂流岡山は、相場の変動に関わらず「一定価格で買い取る」ことで、「天候リスク」「相場変動のリスク」「売れ残りのリスク」などのリスクを生産者・地域商社・量販店の三者に分散する仕組みを取っている。また、このような仕組みで生産者から量販店まで県内で完結する中規模の流通システムとすることで、三者にとって安定して収益性のあるビジネスとなると説明。「農業を通じて地域全体が儲かる仕組み



「生産者が生産に専念できる流通システム」について説明

が全国で模索されている。そうした流れを肌で感じながら儲かる農業を実践して欲しい」と話し、講演を結んだ。(沼田)

## 農福連携

### ハートフルアグリ推進

大阪府は、11月29日から12月4日の6日間を「ハートフルアグリ推進ウィーク」とし、府内各所で多様な事業者の参画によ

る関連イベントを展開した。

同イベントは、大阪府が農業の多様な担い手の確保と障がい者の雇用・就労の拡大を図るため推進している「農と福祉の連携(ハートフルアグリ)」の取組み

大阪府は、11月29日から12月4日の6日間を「ハートフルアグリ推進ウィーク」とし、府内各所で多様な事業者の参画によ

## 事業実施の留意点など説明

### 農の雇用事業説明会・研修会

大阪府農業会議は12月12日、大阪市内で平成28年度第3〜4回募集で採択された6農業法人等(6研修生)への事業説明会及び同事業の研修会を開いた。

事業説明会では、農業会議から事業実施上の留意点について

説明。研修責任者に研修計画とおりの指導を呼びかけ、日々の研修内容や感想を記入する助成金申請書類の記入方法について、実際のパソコン入力様式を使用して説明した。

続いて、社会保険労務士の後藤田慶子氏が、「農業における労務管理について」講演。労働

を広く府民に周知し、理解者となつてもらうために行われたもの。

12月3日、4日には、メインイベントとしてなんばパークスにおいて、「スーパフェスティバル」を開催。ハートフルアグリof マルシェや農産物を使ったスー

基準法の基本的な考え方を説明した上で、特に最低賃金と日・週あたりの労働時間を厳守することを強調。また、農業では、時間外労働の割増賃金は適用除外となるが、深夜労働は割増賃金を払う必要があること等を解説した。

(日浦)

プの販売、府内の福祉施設が制作する物品の販売などを行った。

また、3日には、「広げよう！ハートフルアグリ」をテーマとしたセミナーを開催。全国の農福連携の取り組みや府内のハートフルアグリ先進事例について、農水省農林水産政策研究所の吉田行郷企画広報室長、(一財)大阪府みどり公社の永井啓一氏、(株)パナソニックエクスセルアソシエイ

ツの原直裕氏の3名が講演した。

吉田室長は、農業は障がい者が各々の障がい特性に合った作業で能力を発揮できるため、福祉分野との親和性が高いと説明。永井氏は、大阪は全国に先行して農福連携が進められていくとしながらも、事務所が多く

存在する市街化区域の農地の活用が難しいとの課題を指摘した。原氏は同社のこれまでの取り組みから、農業が障がいのある無による差を縮め、野菜の成長と共に障がい者自身の成長にも繋がるなど様々な利点があると述べた。

4日には、フリーアナウンサーの八木早希氏とNPO法人Rei Liveの松尾匡理事長によるトークセッションを実施。八木氏からは大阪農業の現状と消費者目線の地産地消の重要性や担い手対策としての障がい者の活躍、松尾氏からは自身が取り組む障がい者の就労支援等をテーマにディスカッションした。(沼田)

# 法人化セミナー開く

## 府農の成長産業化推進会議

大阪府農の成長産業化推進会議(注等)は12月1日、大阪市内の日本政策金融公庫大阪支店で農業経営法人化セミナーを開いた。



法人化の目的を明確にと説明する渡辺氏

当日は、農業者、関係機関、団体職員等約50人余りが参加。セミナーでははじめに、税理士渡辺喜代司氏(全国農業経営コンサルタント会員)から「農業経営の法人化について」をテーマに講演があった。

渡辺氏は、冒頭、法人化の目的は「節税のため」や「家計と経営の分離のため」など様々な理由はあるが、本当に考えるべきは「あなたの経営は次の世代に引き継ぐべき経営ですか」ということだと参加者に呼びかけた。

同氏は、法人化する目的と、

現在の経営をしっかりと把握することが必要だと強調した。

次に、(株)東京海上日動火災保険より農業経営に伴うリスクマネジメントについて話が合った。

続いて、「法人化の取り組みについて」と題して(株)フジタナーセリー代表の藤田善敬氏(大阪府農業法人協会副会長)が体験談を発表した。

講演終了後は、法人設立を検討している農業者に対して、渡辺税理士や日本政策金融公庫農業経営アドバイザーにより個別相談が行われた。(浅井)

(注)大阪府農の成長産業化推進会議は、大阪府、JA大阪中央会大阪農業振興サポートセンター、府農業会議等関係機関・団体が構成されている。

# 第9回常設審議委員会

大阪府農業会議は12月16日、大阪市内・JAバンク大阪信連事務センターで第9回常設審議委員会を開いた。

第1号議案の農地法第4条及び第5条の規定に基づく意見聴取に回答する件(茨木市、池田市、和泉市、泉南市、阪南市、堺市、千早赤阪村、大阪狭山市、八尾市、枚方市農業委員会会長)については、17件(2万3240平方メートル)を許可やむを

得ないと認める旨、回答することを議決した。

回答の内容は次のとおり。

### 【第1号議案】

件数	面積(平方メートル)
第4条	6 4737
第5条	11 1万8503
合計	17 2万3240

(農地区分別件数は、3種農地4件、2種農地12件、農用地区域内農地1件)

「女性」は関係なく、農業委員として遠慮せずに発言しなければ変わらない。様々な活動の広告塔として頑張してほしい」とエールを送った。(田村)

# 思いを訴え続けることが重要

## 東海・近畿女性研修

平成28年度東海・近畿ブロック女性農業委員研修会が11月16日、愛知県名古屋市内で開催され、東海・近畿の女性委員ら約150人が参加した。大阪からは岸和田市・池田啓子委員、富田林市・林光子委員、柏原市・山中洋子

会長代理が出席した。

研修会では挨拶の後、全国農業会議所が情勢報告。改正法に基づく新体制へ移行した農委において、農業委員に占める女性の割合が1割を超えているこ

## 貝塚、富田林、守口で

### 農委研修

12月中、各地で農業委員研修会が開かれた。このうち農業会議事務局が出席し、情勢報告を

行った農委研修は次のとおり  
①開催日、②開催場所、③農業会議事務局出席者)  
○富田林市農委(石原三和会長)  
①12月7日、②同市役所、③鈴木専務理事兼事務局長

○貝塚市農委(南川悟会長)  
①12月8日、②同市役所、③浅井農政課長  
○守口市農委(柿本修会長)  
①12月21日、②同市役所、③北川次長兼総務課長

## 訃報

### 四條畷市農委会会長

### 築山和一氏が逝去

四條畷市農業委員会会長の築山和一氏が、12月19日逝去した。享年89歳。昭和53年7月から農業委員、同59年7月から農委会会長。農業会議員、常任会議員、北河内地区連会長を歴任。



### 府内各地の農産物をPR

#### J Aグループ大阪合同農業祭

大阪採れたて農産物消費推進協議会は12月17日、NHK大阪放送局アトリウムで、合同農業祭2016「まるごとせけんぶ大阪産(もん)！」を開いた。同イベントは、今年で7回目。府内で栽培される様々な農産物を

来場者にPRし、大阪の農業への理解を深めてもらうことを目的に行われている。

「なにわの伝統野菜」の認証を受けている吹田慈姑(くわい)や、大阪エコ農産物「泉州さかい育ち」の認証を受けている軟弱野菜のほか、米、ミカン、大根、ネギ、加工品など府内の全14JAが各地の「大阪産」を

直売。12月14日に大阪産の温州みかんが国際宇宙ステーションに届けられたというエピソードに驚く消費者の姿も見られた。このほか、大阪泉州のたまねぎを使用した「大阪ラーメン」の無料配布イベントには行列が出来するなど、会場は大阪産を求める消費者で賑わった。

大阪中央会専務理事)は、「府内の全JAが一堂に会する貴重な機会。大阪にもこれだけの農産物があるということは大いにPRしていきたい」と述べた。また、担当者は、「今までは平日に開催していたが、今回は家族でも来場しやすい土曜日に開催した。食育の推進にも繋がれば」と話した。(沼田)



各ブースは来場者で賑わった

戦後、日本の食を支えてきた農家の数が減少の一途です。その減少スピードに加速がついているように感じているのは私だけではないでしょう。

日本の農業は家族経営から始まり、子供も含め大家族が労働を支えてきました。夏休みや冬休みだけでなく、農繁期には「お手伝い休み」があったことを我々の年代は覚えています。子供も重要な労働力であり、私も小さいながらも親の手伝いが当り前と感じて育ちました。

農業現場も手作業から機械化に移行し、その機械も勤めで得た収入で購入できる。一見農業の現場に近代化が進んでいるように感じますが、機械の償却や米の売り上げを比較すると、ま

が付き、新規就農者にもお手盛りの補助があるようです。しかし、こんな仕組みは農業だけです。そんなに守られないと出来ない産業なのでしょうか。補助金の原資は国民の税金で

しています。米を作りながらニワトリも豚もヤギも飼っている。野菜も花も作り、秋になると漬物なども作っています。毎日生産するものがありそれなりに豊かな時代だったように思います。

業者、消費者をそれぞれ分けるのではなく生産者が食べ手に一番近い消費者を考えるとおのずと農産物を作る方向性が見えてくるのでは無いでしょうか。◇筆者の紹介(なかもら としき)



### 中小規模農家の今後

(有)コスモファーム

代表 中村 敏樹

地を維持するために生産性は一番低いが機械化できる稲作しかやらないのが現状です。

農業法人が大きな負債を抱えて経営破たんしたニュースが頻繁に流れてきます。この大きな損失の責任はだれがとるのでしようか。

また、農業は作るだけが仕事と思わず、生産したものを加工して付加価値を上げ、それを自ら販売する売場の確保も百姓の中の幾つかになるように思っています。

2006年より、少量多品目栽培を香川県高松市の自社圃場で本格的に手掛け、年間200種以上の野菜を栽培しレストラン、高級スーパー等で販売している。

高度経済成長にともない農村部から都市部に人口が流入し、一次産業と他の産業との所得格差が広がり、この辺りから農業の衰退が進んできました。

最近では農業の各種事業補助金が

農業は昔から「百姓」と言われます。私は農業で生きていく上には百の知識が必要だと理解

生産者、流通加工業者、販売





(写真提供：千早赤阪村、「金剛山の里 棚田夢灯り&収穫祭2016」)

### 新しい時代を燈に託して

ゆらゆらとゆれる炎は、人の心を穏やかにしてくれる。炎のゆらぎが人間の心拍のリズムなど、生体エネルギーと交差（シンクロ）し幻想的な世界に私たちを誘う◆千早赤阪村「下赤阪の棚田」は、平成11年7月農林水産省によって、「日本の棚田百選」に認定された日本全国の117市町村、134地区のひとつ。大阪ミュージアム「みどり・自然」部門のベストセレクトシヨンにも選定され、毎年秋には、同構想の特別展として、ライトアップされる◆夜の帳が下りるにつれ、下赤阪城址から見下ろす棚田は約3千本のロウソクの炎に揺らぐ。いにしえに鎌倉幕府軍とこの地で死闘を演じ波乱の生涯を閉じた楠木正成の鎮魂の燈か、それとも新しい時代の幕開けの光か◆昨年は農業改革で農業界は大きく揺れた。自然界に存在するゆらぎは、私たちに平穏をもたらすが、急激な揺さぶりは地域をむしばむ。来たるべき時代にあなたは何を思うのか。

(鈴木)